

近世舟運による都市間の結びつきに関する分析

岐阜大学 正会員 田中尚人

1. はじめに

本研究では、安土・桃山時代から江戸時代にかけて、京都の水辺、特に京都の人々の生活基盤として機能してきた高瀬川、西高瀬川の両運河と、京都と亀岡を結ぶ大堰川（桂川）を対象とした。これらの水辺の治水技術、舟運という河川を利用した交通輸送管理・技術について土木史的に研究を行い、特にこの近世舟運が都市や都市間の結びつきに及ぼした影響について分析を行った。これらの運河、河川改修事業はいずれも、嵯峨の豪商角倉家の一族が関与した土木事業である。

本研究では、既存の文献資料、古地図、絵図などを用いて上記の分析を行っている。また、該当のインフラストラクチャーに関する既往研究として、高瀬川に関する石田の研究¹⁾、高瀬川舟運に着目した筆者らの研究²⁾がある。高瀬川の南端伏見港の物流に関する長尾らの研究³⁾、伏見の都市形成についての筆者らの研究⁴⁾、西高瀬川に関して中林らの研究⁵⁾などがある。本研究ではこれらの既往研究を参考に、インフラストラクチャーと都市形成の関係について分析を試みた。具体的には今まで指摘されることの少なかった、舟運による輸送物資や輸送システムと都市の個性に関して分析を行った。

2. 近世京都周辺の運河網の概要

近世京都の市街地を取り囲む御土居の東側、鴨川との間に角倉家の手により 1614 年（慶長 19）京都～伏見間を結ぶ人工運河である高瀬川（図-1 参照）が開削された。高瀬川は、増加する京都の都市人口を支えるためのインフラストラクチャーであった。

また京都盆地の西端では、同じく角倉一族によって大堰川が開削（1606）、保津川での木材の筏流しなど、河川を用いた輸送事業が展開され、幕末の 1863 年（文久 3）には西高瀬川が開削されていた。西高瀬川は、大堰川において行われていた丹波地方からの木材輸送の延長舟運路として機能し、京都市内へ木材を供給する重要な輸送路として使用された。

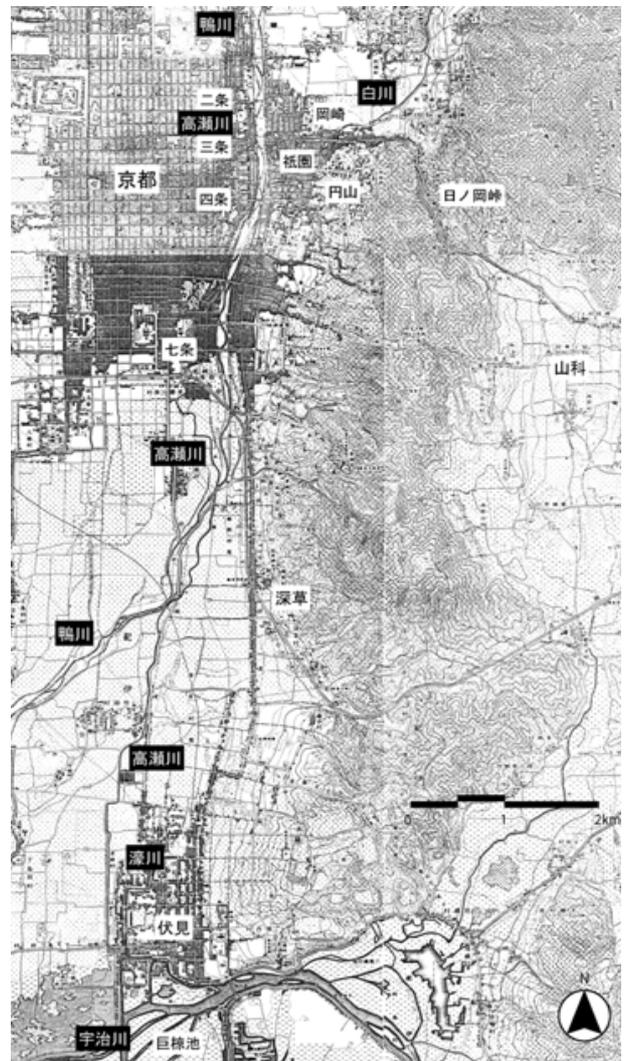


図-1 高瀬川流路（京都～伏見間）

西高瀬川は、嵐山の渡月橋付近大堰川の左岸下嵯峨材木町から取水され東進し、御室川、天神川と交差しながら四条通りに入り二手に分かれる。一方の水路は千本通りまで東進し二条城に至る。もう片方は、南下し梅小路、下鳥羽を経て鴨川と合流する。

近世期ではこれら東西の高瀬川は京都と伏見や亀岡などの郊外の都市、さらには大坂、丹波などの地域とを結んでいた高速旅客・輸送インフラストラクチャー体系であった。急速に都市化した京都と周辺の都市の結びつきは、近世期の舟運システムにより都市に住まう人々には時間的・空間的に縮められたと考えられる。

キーワード：舟運、都市形成、地域開発、京都

連絡先：〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1 Tel：058-293-2447 Fax：058-230-1248 e-mail：naotot@cc.gifu-u.ac.jp

3. 舟運による輸送物資と都市形成に関する分析

高瀬川舟運によって伏見から京都へは、炭や米などの生活物資が運び込まれ、京都から伏見を通じて大坂へは工芸品などの付加価値の高い商品が運び出された。また高瀬川は、京都～伏見～大坂という東海道の延長線上に位置し、旅客輸送の大動脈としても機能した。このようなインフラストラクチャーとしての機能から、高瀬川沿川には京都側、伏見側の両方に以下のような舟運が都市形成に影響を及ぼす際に触媒的に機能する都市施設が立地していた。

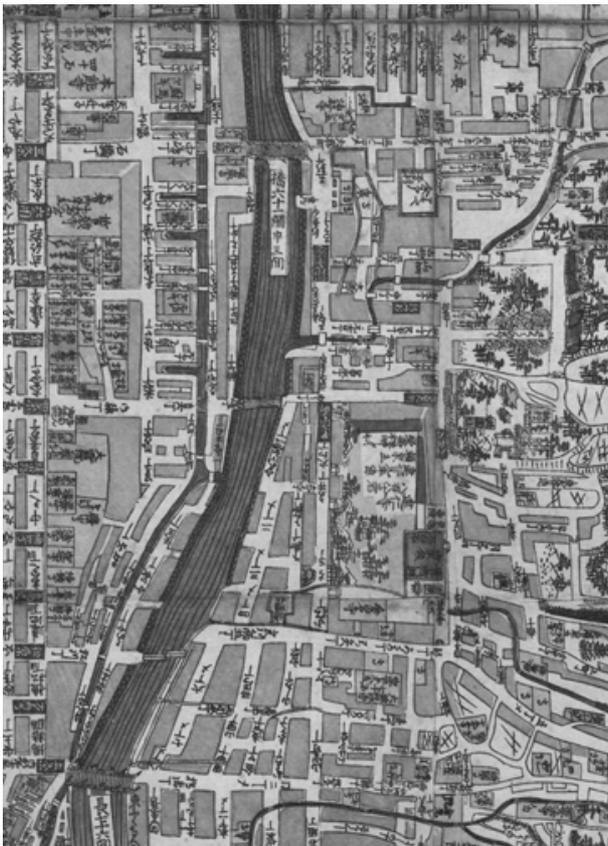


図-2 改正京町絵図細見大成：1831年（天保2）

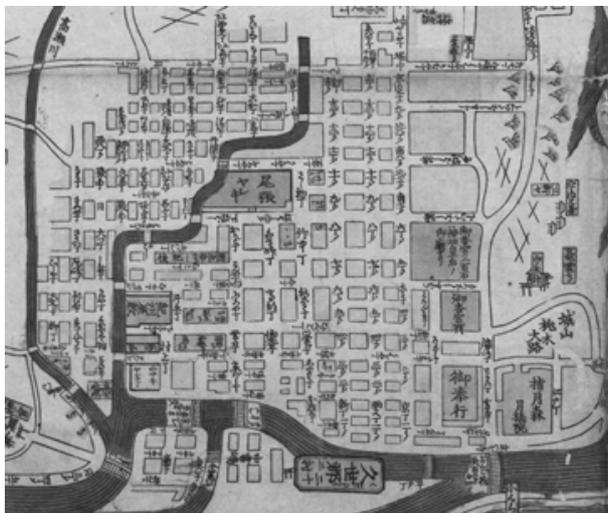


図-3 京町御絵図細見大成：1868年（慶応4）

物流機能に関連した施設：浜、舟入、舟廻し、蔵、問屋、運送問屋

旅客機能に関連した施設：旅籠、船宿、藩邸、高札など情報提供施設

これらの施設は、名称に地名であったり取引のあった都市名や、舟運による輸送物資の名がついていた。例えば、輸送物資の市場が併設される浜では、米浜、菊浜、富浜などの名称が見られた。

このようにインフラストラクチャーによって運ばれた市民の生活に直接関わる物資に因んだ都市施設が立地することは、界隈の個性を生み出し、都市の賑わいを生み出したと考えられる。インフラストラクチャーの機能を市民が理解することは、同時に都市の住まい手、使い手としての市民を育てることに成り、コミュニティ形成に良い影響を及ぼしたと思われる。

4. おわりに

今後この都市形成に関する分析を、西高瀬川沿川、大堰川沿川にも広げ、京都市西部や亀岡での都市施設の集積状況や、都市の個性的な発展について調査を行う必要がある。また、このような個性的な都市形成が見られた京都と郊外の諸都市との結びつきが、舟運という水辺のインフラストラクチャーによって支えられてきた事実を検証し、湊町の特質を整理し今後のインフラストラクチャー整備に役立てたい。

謝辞 本研究は、文部科学省科学研究費特定領域研究「江戸のモノづくり」の研究助成を受けて行ったものである。また京都市歴史資料館、京都府立図書館、京都大学附属図書館において文献、資料を収集させていただいた。記して感謝の意を述べる。

参考文献

- 1) 石田孝喜：京都史跡辞典，新人物往来者，1994。
- 2) 田中尚人・川崎雅史・鶴川登紀久：舟運を基軸とした京都高瀬川沿川の都市形成に関する研究，土木計画学研究・論文集，No.17，491-496，2000。
- 3) 笹松明男・金井萬造・長尾義三：日本最大の河川港湾都市伏見港の生成と衰退，第8回日本土木史研究発表会論文集，pp.230-236，1988。
- 4) 田中尚人・川崎雅史：京都伏見における水辺の近代化に関する研究，土木計画学研究・論文集，No.19，331-338，2002。
- 5) 中林浩：居住景観の形成過程と計画目標像に関する研究，京都大学学位論文，1996。